

氏名	MOONEY Suzanne Carol (ムーニー スザンヌ キャロル)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第59号		
学位授与日	平成26年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	THE CITY-VIEW OBSERVATORY AS THE NEW MOUNTAIN SUMMIT-DECONSTRUCTING THE VIEW. An exploration of the immersive experience of city-view observatories in Tokyo.		
	都市を眺めること：新たな山頂としての展望台と景観の分解について 東京の景観における没入体験の探求		
審査委員	主査 教授	久保田 晃弘	
	副査 教授	西嶋 憲生	
	副査 准教授	佐々木 成明	
	副査 東京都写真美術館 主任学芸員	笠原 美智子	

内容の要旨

From the broad theme of urban landscape, the subject of this thesis has narrowed to focus on the view, and the act of viewing, from city-view observatories. The premise being that the act of viewing a cityscape from a city-view observatory can have a similar function to that of viewing the landscape of the view from a mountain summit, and that this experience—the visualization of the city in this manner—is integral to the city-dweller's self-image.

Themes such as Space and Place have become ubiquitous across a broad spectrum of research disciplines. The shifting of our perception of reality, and the space or place in which this reality is, or these realities are, situated, is no doubt a catalyst for such a surge of recent interest. The development of technology has impacted the connectedness of this current generation of urban-dwellers, transgressing geographical borders, and even physical space, to form a shared global culture, existing on both physical and virtual planes. Within the majority of developed countries, the bulk of the populace lives or at least works in the urban centers of their respective countries. Therefore, it seems appropriate to look at urban landscape, and the interactions of people with these sites, as a starting point when considering issues related to contemporary culture.

The view of the city from above, through its panoramic aesthetic and effective disorientation of the viewer's sense of space, has the potential to produce a viewing experience that is immersive. The predominantly visual experience of the city-view observatory, and the residual mental image left in the mind of the viewer combined with the reproduction of such images in the media, may even replace the ground-level experience, as representative of the city in the mind of the urban dweller.

Following on from an exploration of Romanticism in chapter one, the relationship between the city and its inhabitants in chapter two and the investigation into immersive experiences of landscape and the city view in chapter three, chapter four introduces Outside In—a body of artworks which attempts to bring together all of these strands of inquiry. Taking this proposed function of the city view as a point of departure, I describe and analyse my re-working and re-presentation of this view, through my studio practice. The method applied in the process of making and presenting this body of work Outside In is to re-construct a spatial experience for the viewer. The new experience is intended to highlight and further encourage the self-reflective nature of the original city-viewing experience.

Outside In employs motifs of Romanticism, but the works themselves are not of this genre; not even a New Romanticism. The works are derived from photographic images of the city view, but do not seek to create an illusion of being inside this landscape. The works relate to illusion, but reveal all of their tricks within a moment. They are the illusion laid bare—a first step to beginning a conversation about the desire to be deceived. Through the construction and analysis of the body of work Outside In, I consider the viewer's role and their interaction with the artwork, including the physical navigation, and the mental connections required to finalize the artwork in the mind of the viewer. Finally, the idea of the deconstructed view is presented, considering how the absence of illusion combined with transparency of intent allows the viewer to become self-aware and active in their capacity as viewer.

「空間」と「時間」は、コンテンポラリーアートや建築、社会学や文化関連学問といった様々な分野において、長い間普通のテーマとなってきた。そうした各分野間における概念の相互交流は確かに重要であるが、このテーマへの興味はむしろ、現在の文化的文脈の影響から生み出されてきたものというべきであろう。私たちの現実の知覚がシフトし、その現実や現実が存在する空間としての「場」が、こうしたテーマに対する興味をますますかき立ててくれる。現代の私たちの文化の大部分は、ある特定の文化的遺産へと吸い込まれていく、隔離されたコミュニティで起こるものではない。私たちは今日、それぞれの文化を共有し合い、国境や超える、そして物理的空間を超える、物理的およびバーチャルな次元に存在するグローバル・カルチャーを構築している。ほぼ全ての先進国において、人口の大半は都会化した中心地域に住むか、そのエリアに通勤する。そうした状況の下では、都市の風景、あるいはその「場」の人々の相互作用に焦点を当てる必要がある、それらを考察の対象とすることが、現代文化について研究していくための出発点になる。

都市の風景というあまりに幅広いテーマを絞っていくために、本研究の対象を都市の展望台、具体的に東京の展望台とした。私が検証していきたいのは、展望台から観察される風景を眺める行為は、山頂からの景観を眺める行為と機能的には同等になり得る、という仮説である。

第1章でロマン主義、第2章で都市空間について述べた後、第3章で自作の「Outside In」について詳説する。パノラマや展望台の眺望をテーマに制作した「Outside In」には、ロマン主義のモチーフが採用されているが、作品自体はロマン主義のものでも、新ロマン主義のものでもなく、イリュージョンに関連している。

審査結果の要旨

本論文の著者のスザンヌ・ムーニーはアイルランド出身の、写真を中心に研究創作活動を行うアーティストである。本研究は、都市の風景(ランドスケープ)を出発点に、展望台から見る都市の眺望と、都市の風景を眺める行為をテーマに行われた。研究を行うにあたっての仮説は、展望台から都市風景を眺める行為は、山頂から自然風景を眺める行為と機能的な類似性がある、ということ。そして、展望台からの都市の可視化という経験が、都市生活者の自己イメージには不可欠だ、ということである。

本論文は、4つの章から成り立っている。まず第1章では、本論文で都市における経験を考察する上で、もうひとつの重要なテーマとなっている「ロマン主義」に関する探求と考察を行う。続く第2章では、そこから都市と都市生活者の関係性について検討し、さらに第3章では風景と都市の眺望における没入的经验について考察する。「没入」も本論文における重要なキーワードのひとつである。こうした探求を踏まえて、最後の第4章では、これらの考察をひとつに結び付ける「アウトサイド・イン」という著者自身の作品について紹介する。この作品は、論文における考察同様、都市風景の眺望の経験を創作の出発点とし、都市風景の再表現と再解釈を写真をベースとしたスタジオワークを通じて行った結果である。つまり「アウトサイド・イン」という作品とその展示で著者は、鑑賞者の空間的经验を再構成することを試みる。その作品の体験から生まれた新しい経験は、これまでの都市風景の眺望が含んできた self-reflective な自己省察の側面を強調し、それをさらに促している。

次に各章の内容について、より詳しく述べていく。

第1章では、ビジュアル・アートにおけるロマン主義に着目し、それがどのような状況の中で展開されていったのかを考察している。18世紀後半と19世紀における技術発達のキーポイントを示しながら、そのなかでも特に写真の発明と社会産業化、そして都会化に焦点を当てる。現代の芸術が私たちの今現在の社会発展や技術発達を反映しているのと同じように、19世紀のロマン主義の作品は当時の変化しつつある関係を反映している。自然風景にせよ人工的風景にせよ、個人と景観の関係性を検討する上で、そうしたロマン主義は現代という文脈の中で再活用できる。例えば、サブライム「崇高」は、ビジュアル・ツールとして、未だ効果的であるし、それを現代の文化と関連づけることもできる。その他にも、例えばいわゆる「Rückenfigur(人間の後ろ姿)」というロマン主義絵画の構成要素は、現代のジェンダー・ポリティクスやメディア固有の関心などに結びつけて再解釈することもできる。

第2章では、私たちが空間、特に都市の空間をどう知覚し、どのように体験するか、ということに着目している。五感による感覚といった素朴な議論から始まり、その後地面レベルでの都市空間の体験と、上から都市を眺める体験の違いについて論じている。都市の生活者が精神的、社会的、そして物理的な構成要素の組み合わせである都市空間に生きていることを考慮に入れると、彼らの都市との関係、または都市の知覚はとても重要である。都市とそこに生活をする人々の関係は、19世紀の田舎や自然環境の中で暮らした人間に比べて遥かに複雑である。意識されるされないに関わらず、自分が都市の一部となる欲求、そして自分が都市生活者であるという認識に対する欲求が人間には存在している。これらの欲求は、直接または間接的に、自分が人類の技術的発展の一部でありたいという望みとも関連している。この章の最後に著者は、規模(スケール)にフォーカスを当てる。都会生活者のアイデンティティは進歩や発展という概念の象徴としての都市のイメージに結びついており、それは都市と都会に生活をする人々の関係において、とても重要な役割を果たしている。

第3章では、風景に吸い込まれる、浸される(イマージョン)、という現象について考察を行う。鑑賞者が風景に浸される感覚が、パノラマ展望台、あるいは技術によって生じる。本章の冒頭でまず、写真と都会風景の発展の同時性について考察する。次にパノラマやジオラマ、そ

の他初期の没入型技術を取り上げる。それらの発達は第1章で述べたように、提示する技術と哲学、そして芸術の展開と同時に起こる。この初期の没入型技術は、現在のアートにおける仮想現実(バーチャル・リアリティ)の発展の土台となり、それぞれに関する概念的、理論的展開のベースとなった。メディアアートにおいても、バーチャル・リアリティに対する、様々なアプローチがある。そこには現在の技術を利用するのがありますが、ローテクな錯視のような作品もある。共通点なのは、どれもある度合いのイリュージョン錯覚またはイマージョン没入の効果があることだ。

第3章の最後で著者は、展望台に焦点を移し、そこでイマージョンのイリュージョン、すなわち没入の錯覚を発生させるパノラマ景観の利用について論じる。都市風景の眺望経験には、そのパノラマ的審美眼や、鑑賞者の空間感覚を意図的に混乱させることによって「没入的」あるいは「超越的」な眺望経験を作り上げるポテンシャルがある。主に視覚的な経験である都市展望台からの眺望と、その経験が鑑賞者の頭の中に残すイメージが、メディアによる反復と組み合わせられることで、都市生活者の頭の中にあるその都市を代表するイメージが、地上レベルの生活によるイメージから都市展望台経験の影響で生まれた都市イメージに置き換えられていく。

第4章では、論文と並行して制作された著者の「アウトサイド・イン」というシリーズの作品を自ら論じる。このシリーズは東京のいくつかの場所を利用して作られたパノラマ映像の制作を通じて、元々の風景を映像で再現することの意味を考察する。もしそれが空間が広がっていくような感覚を引き出せれば、古典的なパノラマのように鑑賞者が没入的体験をすることができ、ポジティブな反応が期待できる。しかし錯覚を通じてそういった没入的効果を作り上げることが、この作品の目的ではない。このシリーズのすべての作品は、都市景観を「分解・解体」し「再構築」することを通じて、観察者自身が持っている「吸い込まれたい」という願望自体に気づかせることが最大の目的である。すると鑑賞者は、自分自身に対して自覚的になり、能動的鑑賞者(active viewer)となる。風景を眺める、といった作品のビジュアルな構成要素をそのまま残しながら、「眺める」という鑑賞者の行為自体にフォーカスを置くことによって、作品の中心が風景から鑑賞者の行動に移る。

「アウトサイド・イン」にはロマン主義のモチーフが採用されているが、作品自体がロマン主義やニュー・ロマン主義というジャンルに属しているわけではない。また、この作品は都市風景の写真をもとにはしているが、鑑賞者がその風景の中にあるようなイリュージョンを作り上げることが目的にしているわけでもない。もちろんこの作品は、イリュージョンと関係はあるが、そのトリックが意図的にバレてあつという間にわかってしまうようになっている。それは「透明な錯覚」あるいは「むき出しのイリュージョン」とも言えるだろう。この作品は「騙されたい」という欲望についての対話を始める第一歩でもある。「アウトサイド・イン」は作品そのものよりも、鑑賞者の役割、そして鑑賞者と作品の相互作用を顕在化する。そこには作品が展示される空間の鑑賞者による物理空間ナビゲーションや、作品が鑑賞者の頭の中で完成されるための思考プロセスにおけるインタラクションが含まれる。著者のいう「解体された眺望」は、錯覚イリュージョンの「欠如」および意図の「透明性」によって、鑑賞者の視点をも自分自身に向けさせ、鑑賞者が「アクティブな鑑賞者」になることを促す。

現代の都会社会において、展望台から都市を眺めるという行為は、観察者の頭の中に都市のイメージを形成させる。しかしこのイメージは、都市空間における日常生活の経験とは切り離されている。都市を全体として見ることは、都市のある種の視覚化であり。そこから生まれたイメージは、都市生活者の自己イメージと統合される。そうすることで、鑑賞者は自分自身が人間文明における発展と進歩の波の一部であることを意識するようになる。

19世紀以降、我々の生活環境は画期的に変わってきたが、人間は根本的なレベルではそれほど変わってはいない。今日、ロマン主義の風景画やパノラマはかつての魅力やインパクトを失ったが、その種の経験を欲した人間の欲求はそのまま存在している。かつて人をびっくりさせ

た単純な写真の力が、バーチャルな世界に完全に没入させる魅惑的な経験へと発展してきた。著者は作品と論文を通じて、私たち自身が生きる場所と私たちとの関係の本質についての議論を呼び起こしたいと考えている。

私たちは今日、それぞれの文化を共有し合い、国境や物理的空間を超えたグローバル・カルチャーを構築している。ほぼ全ての先進国において、人口の大半は都会化した中心地域に住むか、そのエリアに通勤する。そうした状況の下では、都市の風景、あるいはその「場」の人々の相互作用に焦点を当てることが必要であり、それらを考察の対象とすることが、現代文化について研究していくための出発点になる。本論文は、そうした今日的なテーマに対して、作品と研究の両側面からアプローチしたユニークな研究であり、そのオリジナリティと美術デザイン的な意義は非常に高い。以上のような観点を総合し、審査委員の総意として、本論文を学位を授与するに相当のものと認める。

(久保田 晃弘)